Material Stories

建設×史材

金属

No.4

浅草寺

東京都台東区浅草

東京都台東区の浅草寺境内には賑わいが戻り始めていた。平日の朝、制服姿の修学旅行生が仲見世のあちこちでマスク越しに話を弾ませている。そんな光景のなかを奥に進んで正面を見上げると、入母屋造りの大屋根に、落ち着いた色調の「日本瓦」が悠然と並んでいた。浅草寺本堂（観音堂）の大屋根だ。いぶし瓦を起源とする日本瓦は神社仏閣には欠かせない建材だが、この瓦はチタン製である。チタンのイメージはなく、いぶし瓦そのものに見える。

チタン瓦は、建築主の浅草寺が「多くの人が訪れる場所であり、災害に強いものを」と安全を最優先して英断したもので、大幅な軽量化によって耐震性が向上している。初の採用は2007年竣工の宝蔵門、次いで10年竣工の本堂、17年竣工の五重塔になる。宝蔵門、本堂はともに日本瓦から、五重塔はアルミ瓦からそれぞれチタン瓦へ葺き替えた。本堂は屋根全体の重量が約930㌧から約180㌧へと、5分の1程度まで低減されている。耐久性・耐食性に優れており、メンテナンスフリー。屋根にビス留めされているため地震による落下の心配もない。

安全性に加えて、日本瓦同様の重厚な風合いを表現できたことも、チタン瓦が採用された大きな理由だ。「プロもあざむく不思議な金属」とメーカーが言うほど、チタンは見た目が金属かどうかわからない仕上げができる。光沢を無くし、濃淡を付けることで、本瓦の焼きムラのような風合いが生まれる。ただ、「スプリングバック」という曲げても元に戻ってしまう性質があり、これを克服するのに数年の歳月を要する苦労があった。

本堂は2011年、チタン瓦で初詣に訪れた人を迎えた。

本堂の大屋根葺替えの面積は3,100㎡。作業中も参拝者を受け入れるため、軽量トラス製の素屋根（縦横65m×55m、高さ40m）で本堂をすっぽりと覆い、瓦の撤去から防水下地、チタン谷瓦葺き、山瓦葺きなどの改修が進められた。本堂はSRC造（屋根S造）、地下1階・地上1階・中2階、延べ3,479.95㎡

撮影：山田新治郎（表紙、並びに当ページ）